



小説の未来 (21)

不可解な悩み

春日信彦

記号マジック

人間脳の特徴の一つに、記号（言語を含む）の生産があります。記号は、歴史的に、創造の主要な役割を担ってきました。そこで、記号世界の独立性と記号による脳機能支配について考察したいと思います。

人は母胎にいるときから、母親から様々な記号を受信し、生まれてからは、毎日のように意味不明の記号を聞かされます。それらの記号は、感情や思考を形成し、各方面の脳機能をコントロールしていくのですが、あまりにも日常的であるため、それら記号の作用に対して意識しません。

成長するに従い、脳細胞によって大量の記号が生産され、それらの記号は、次第に脳機能を規制するようになります。つまり、記号を媒介として、考え、行動するという行為は、無意識に、記号にコントロールされているということなのです。

そこで、記号がいかにか、思考や感情をコントロールしているかを見てみましょう。脳細胞によって、多種多様な記号が作り出されています。また、それらの記号が各方面の脳細胞にいろんな指示を出し、多様な脳機能を作り出しています。

そこで、具体例として、時間的認識について考察してみましょう。多くの人は、学校で歴史を学びます。進化論的な考えでは、数万年前の人間は、猿のように体毛の多い類人猿だった。次第に、脳は進化して、体毛は減少し、家族を作り、火を使い、物を作り出し、言葉が話せるようになって、現代人になった。

このように昔のことを”記号化”すると、あたかも自分の目で見たかのように、猿人から現代人までの変遷がイメージできます。でも、当然のことですが、現実には、数万年前に戻って、ネアンデルタール人やクロマニヨン人を見たわけではありません。

不思議なことに、我々は、現実に体験していないことでも、記号化されてしまうと、未体験の過去の事実を、あたかも、体験したかのように思えるのです。まさに、そこに、”記号マジック”があるのです。

つまり、人は、未体験の過去のものであっても、記号化されてしまうと、それを過去の事実だと”思い込む”のです。言い換えるならば、過去の事実であったとしても、それが記号化されなければ、過去の事実として認識されず、存在しなかったことになるのです。

身近な過去についても同様に、1ヶ月前のことは、記憶に新しい経験ですから、ある程度は具体的に記号化できます。記号化されたものは、正確に言えば、事実そのものとは違うのですが、事実だと思い込み、納得します。一方、記号化されなかった事実は、その人にとっては、過去ではなくなってしまうのです。

私たちは、記号やイメージを使って過去を認識します。だから、人にとっての過去とは、記号やイメージでしかないのです。当然、それらは、”脳機能の産物”でしかありません。

未来においても同じようなことが言えます。自分にとっての未来は、記号化されたも、もしくは、イメージ化されたものでしょう。当然、過去と違い、未来は未経験なるものですから、記号もしくはイメージで表す以外ないのですが。

つまり、私たちが認識している過去と未来は、”記号もしくはイメージでしかない”ということなのです。言い換えれば、”現実そのものではない”ということです。だから、記号やイメージで認識している”過去と未来”は、「虚構の世界」であるといっても過言ではないのです。言い方を変えれば、我々が思い描いてる”過去と未来”は実体のない「言語の世界」でしかないということなのです。

仮に、人が、言語力と想像力を失えば、過去も未来も認識できなくなるということです。極端な言い方をすれば、その人にとって、”過去も未来も存在しない”ということです。

もっと、具体的に言えば、今、私たちは、風景を見たり、音楽を聴いたり、と視聴覚を使って、現実を実感しています。でも、その人にとって”このような現実”は、その人の”脳機能ではない”のです。つまり、脳機能を失えば、その人の現実は失われるのです。

記号・概念が悩みをつくる

ここで、“悩み”と“記号・概念”の関係について考察してみましょう。人には、感情が存在しています。感情は、記号で表せるものもあれば、表せられないものもあります。また、感情と深くかかわっている悩みがあります。悩みも、同様のことが言えます。

思考や感情は、記号・概念によって生み出された産物です。また、記号化されていない概念（脳機能）は無限とっていいほどあります。そう考えると、既存の多種多様な記号・概念が、新たな概念（脳機能）を作り出していると考えられます。

ところで、いったい、“悩み”はいかにして生まれてくるのでしょうか？悩みは、不安感情、憂鬱な気持ち、として現れるので、自然発生的、生理的、なものと考えられるでしょう。また、理性では理解できないもののようにも思えます。

ところが、意外に思われるでしょうが、悩みを作り出しているのは、“記号・概念”といえるのです。ただ、それに気づいていないということなのです。“悩み”をすべて記号化できれば、悩みの実態がつかめるのですが、やろうとすれば、気が遠くなるような作業となります。

胎児の脳は、母胎にいるころからいろんな記号を受信し、それらの記号が作り出す概念によって形成されていきます。ところが、ほとんどの人は、どんな記号を受信して、どのように脳細胞が形成されていったかの自覚はありません。

いったい、どこからやってきたのか？全く見当がつかない”不可解な悩み”は、記号で自覚することが、とても困難なのです。もし、心の奥に潜んだ悩みをすべて記号化し、そのための具体的な対策を考えられたならば、どれほど、気が楽になることか。

”なんとなく憂鬱”、”気分がすっきりしない”、”イライラする”とか、現象的な感情であれば、ある程度は、記号化できるかもしれませんが、悩みの根源的な部分を記号化することは、至難の業です。

悩みを作り出しているのは、すべて記号だとは言えませんが、やはり、多くの場合、記号が作り出しています。赤ちゃんの頃から受信した親からの記号。学校の先生や友達から入手した記号。教科書、TV、新聞から入手した記号。ネットから入手した記号。このような多種多様な記号が、悩みを作り出しているのです。

”不可解な悩み”を知るには、何らかの方法で、悩みを具体的に記号化しなければなりません。でも、できないからこそ、ますます悩みは深刻化し、最悪の場合、自暴自棄になって自殺する場合も出てきます。

人は、胎児のころから膨大な量の記号を無意識に記憶しているのです。だから、脳に内在する記号・概念を客観的に理解することは、かなりの時間を必要とし、苦痛を伴う作業となるのです。でも、”不可解な悩み”を理解する上において、内在する記号・概念を具現化し、理解することは、必要になります。

それでは、脳に内在する記号・概念を客体化し理解するのは、どうすればいいのでしょうか？このことは、そう簡単ではありません。というのは、既存の記号・概念は、自然発生的に独自の記号・概念を無限に創造し続けるからなのです。

”不可解な悩み”の記号化

胎児のころから集積された既存の記号・概念は、新たな記号・概念を生産し続けています。だから、脳は、自覚が困難な概念が増大し続ける宇宙といってもいいでしょう。このような脳宇宙に内在する”不可解な悩み”を客体化するには、自覚が困難な概念をどうにかして、記号化しなければなりません。

自覚が困難な概念を記号化する方法ですが、そう簡単に思いつくものではありません。私は、読書したり、物思いにふけったり、詩を書いたり、エッセイを書いたり、と高校時代に漠然と模索しましたが、皆目見当がつかず、糸口がつかめませんでした。結局、無意識に、やり始めたことは、小説を書くことでした。

感情概念だけ記号化するのであれば、詩、俳句、短歌、などが考えられます。また、思考概念だけを記号化するのであれば、論文でいいかもしれません。両方の概念を記号化するとなれば、小説が最も効果的ではないかと思います。

私にとっては、心の奥深くに潜む悩み、苦しみ、悲しみ、などの考察には、小説が最適だと感じています。だからといって、誰しも私のようなやり方が最適だとは言えません。その人それなりのやり方でいいのではないのでしょうか。

私にとって、小説を書くということは、あくまでも脳に内在する”不可解な悩み”の記号化であり具現化です。だから、その人なりに自分ができる悩みの具現化を試行錯誤すればいいのではないかと思います。もし、記号化がにがてな人であれば、絵画、音楽、スポーツでもいいと思います。

生きるということは、自分を活かすことです。より有効に、自分を活かすには、脳に内在する”不可解な悩み”を具現化する必要があります。私にとって、小説は、一つの手段なのです。

すでに述べたように、小説ほど自由な創作はないと思っています。難しい技術は必要ありません。自分の考え、感情を自分勝手に記号化すればいいのです。他人の評価を気にする必要はありません。

自分の気持ちがよくわからない、自分の未来が見えない、人間関係がうまくいかない、何をやればいいのかわからない、学校に行きたくない、仕事に行きたくない、だれとも話したくない、もう、死にたい、このような悪魔に取りつかれたような悩みを持っている人は、たくさんいます。

でも、悩みを一瞬にして解決する方法は、ありません。だからこそ、やけくそでもいいのです。気晴らしに、自分勝手に、いい加減な、ちょっとした小説を書いてみてください。きっと、思いがけない小さな光が見えるはずです。

生きていれば、必ず、何らかの作品は作れます。第一歩は、何でもいいのです。自分ができる簡単なことから始めればいいのです。日記、詩、短歌、俳句、歌、絵画、楽器演奏、瞑想、座禅、読書、スポーツ、料理、散歩、サイクリング、登山、旅行、ドライブ、など。そして、徐々に、自分の作品に向かっていけばいいのです。

私を救ってくれたのは、小説を書くことでした。生きていれば、何かが助けてくれるものなのです。そのためには、勇気を出して第一歩を踏み出すことです。一步を踏み出せば、次に二歩を踏み出したくなります。誰も、自分を活かすことは可能です。ともに、自己を活かすために頑張りましょう。